2012 年　10 月号

滑稽俳句協会会長　八木　健氏　に聞く　48

紅緑偏「滑稽俳句集」を読み解く 40　（聞き手　高橋素子）

高橋 ＞　**五十六十花なら蕾　七十八十働き盛り　九十になって迎えが来たならば百まで待てと追い返す・・・**お馴染みの格言含みの健康食品のコマーシャルが、今日もテレビから聞こえて来ます。高齢社会を反映したその言葉に、改めて元気づけられているような毎日ですが、会長は、いつも張り切ってお仕事、お元気でいらしゃいますね。何か秘訣でもお有りなのでしょうか？

会長 ＞　張り切って、元気。確かに様々なことをしていて、多忙です。多忙が元気の秘訣ですね。滑稽俳句協会、浪曲虎造節保存会、俳句美術館などを立ち上げましたが、それぞれに深く関わっています。この度、虎造節の全国大会で日本一になった者は、「廣澤」の姓を継承できることになりました。国の重要文化財、萬翠荘の館長としても、日々様々なことをしています。先日は、萬翠荘でNHKと民放のアナウンサー十二名による朗読会を開きました。萬翠荘では俳句美術館展を来年一月に開催します。その作品作りにも取り掛かります。選者の仕事も月刊俳句総合誌「俳壇」、日本農業新聞の俳壇、愛媛新聞の川柳アートがあり、放送の仕事も愛媛CATVで「八木健のCATV俳句」を放送。このほど同じCATVから、「川柳天国」も始めました。ラジオも南海放送で、俳句・川柳の可笑しい句をとりあげる番組をやっています。講演の仕事もあり、公園に散歩にも行けない状態です。毎月、横浜で八木健の俳句塾の講師をしていますが、初心者向けの講座も始めました。松山でも、ゼロから始めて十回で俳句の指導者になれる講座を開いています。二十六名の受講生で、六回目になりますが、一人もやめません。基本的に好きなことだけやっています。好きなことならいくら多忙でも出来る。元気の秘訣は、「好きなことだけやる」ですね。

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

高橋 ＞　うわあ、大変！超人的なお忙しさですね。お元気の秘訣！私たちも見習わせて頂きたいです。

それでは、本日も紅線の「滑稽俳句集」の「冬動物」、前回に引き続き季語「鰒」から始めさせて頂きます。ご解説よろしくお願い致します。

鰒汁やもやひ世帯の総いびき　一茶

鰒生きて腹の中にてあれる哉　子規

來年の事いへば河豚ぞ笑ひけり　子規

鰒汁三たび諫めて箸をとる　鳴雪

鰒汁のひそかに氷る厨かな　虚子

会長 ＞　では、本日も「滑稽俳句集」の俳句の数々、鑑賞して行きましょう。

「鰒汁やもやひ・・・」、「もやひ世帯」は複数の家族が同居することですね。総勢何人か鼾をかいて寝ている情景ですね。

「鰒生きて腹の中・・・」、食べるときは　生きているとも思えぬが、食べてから胃の中で暴れるような感じがした。それほど精の強い魚ということですね。

「來年の事いへば」、来年のことを言えば鬼が笑うのが一般的。来年も食うぞと河豚に語りかけたところ、河豚が来年食べられますかねと笑ったのです。

「鰒汁三たび諫め・・・」、この諫めては河豚汁に語りかけているのです。「あたるなよ、せっかく食べてやるんだから・・・」、という事ですね。

「鰒汁のひそかに」、食べるのを途中でやめたのか、　食べ残したのか、河豚は脂肪が多いからかたまりやすい。ひそかに凍るは、人目につかないところに置かれている鍋の中で変身している河豚汁を「ひそかに」と見たのですね。

高橋 ＞　やはり鰒は昔から、いえ昔であるからこそ、なお一層恐れられていた様ですね。子規も鳴雪も随分怖がって、面白い句を詠んでいますね（笑）。鰒の句を続けてご解説下さいね。

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

蓋取れば河豚が煮えくりかへる哉　　爪弾

人の愚は我愚に如かす河豚汁　　爪弾

驚いてい諫る妻や河豚汁　　麥人

無筆には繪で知らせけり鰒の文　　紅緑

口ふいてぬからぬ顔や鰒喰ひ　　紅緑

会長 ＞　「蓋取れば河豚が･･･」、河豚鍋で沸騰したところ、頃合を見て蓋をとったところ、煮えくり返っていた。河豚が怒りをあらわにしていたように思って、煮えくり返る鍋にかけたわけですね。

「人の愚は我愚に･･･」、河豚毒にやられて死ぬ人が多かった。それでも河豚の魅力に勝てずというわけです。

「驚いてい諫る妻･･･」、河豚汁を食いに行くと聞いて中毒を怖れたのですね。「おやめなさい！必ず死にます！」等と･･･。

「無筆には繪で･･･」、河豚を食べに行く誘いの手紙で、「鰒」の字を読めぬかも知れぬということで繪を描いた。なるほど、アイデアですね。

「口ふいてぬからぬ･･･」、「ぬからぬ顔」は、ぬかりない顔という意味です。河豚は獰猛で、栄養価も高いから河豚を食べるとそんな顔になるのでしょう。口ふいては、次の悪巧みにとりかかる、そんな感じです。

高橋 ＞　う一ん！益々面白くなってきましたね。でも残念ながら、ここで鰒の句は終わりです。次の季語は、「海鼠」です。また沢山の句が掲載されているようです。続けての面白いご解説、期待しています。

そこここと見れど目のなき海鼠哉　　太祇

胴切にしもせざりける海鼠哉　　太祇

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

海鼠にも針こころむる書生かな　　蕪村

生きて居るものにて寒き海鼠哉　　几薫

水底の海鼠にあたる海鼠かな　　買明

黄粉でもふりかけさうな海鼠哉　　碩布

会長 ＞　「そこここと見れど・・・」、海鼠は頭がどこについてるのか分かりませんからね。当たり前のことを言っていますが、実はそこに可笑しさがあります。

「胴切にしもせざり・・・」、胴切りにしてもしなくても同じということですね。胴切りにすることをためらっている。「胴切り」を免れた海鼠の風景が見えてきます。

「海鼠にも針・・・」、「針こころむる」、これは、鍼灸の針ではありません。料理しかねて尖ったもので刺したのです。しかし、どうすることも出来ぬという可笑しさです。

「生きて居るもの・・・」、グロテスクな色かたちに、寒さを感じたのですね。生きているからこそ感じたのです。

「水底の海鼠に・・・」、桶の中に複数の海鼠があって互いにぶつかり合っている。原始的な生き物ですから、逃げるという明確な意思を持たない。だけど、ぶつかりあう、そこに可笑しさがありますね。

「黄粉でもふり・・・」、このままではとても食えるものではないから、黄な粉でもかけたら何とかなるという意味。これも無責任な可笑しさがあります。

高橋 ＞　「鰒」の次は「海鼠」と、ゲテモノ喰いが好む様な季語の句ばかりですね。流石にあのグロテスクな姿には、いろいろと面白いアイディアの句が沢山並んでいますよ。続けてご解説下さいね。

海鼠喰ひ海鼠のやうな人ならめ　　子規

海鼠かな捕へられたる顔もせず　　鳴雪

海鼠汝ふみつけるべき面もなし　　極堂

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

生きてゐる海鼠と見えてこぼらざる　　菰堂

海鼠曰く我亦別に主張あり　　天風

大乗も小乗もなき海鼠かな　　吾空

何の故に恐縮したる海鼠哉　　漱石

生きながら成佛したる海鼠哉　　雪膓

会長 ＞　「海鼠喰ひ海鼠の・・・」、海鼠のような人とは、とらえどころの無い奴ということでしょう。決して褒めてはいませんね。

「海鼠かな捕へられ・・・」、海鼠は原始的な生物だから、顔が震えるわけでもない。それを承知の上での句です。意味としては、捕らえられても悲しい表情すら出来ない「哀れ」を句にしていますね。

「海鼠汝ふみつけ・・・」、この句も海鼠に顔の無いことを言っていますね。海鼠に対して、「お前は踏みつけようとしても顔が無い哀れな奴だ」と。

「生きてゐる海鼠・・・」、生きている海鼠は、互いにくっつき合うのでしょうね。だから器を傾けてもこぼれないことを発見したのです。それは意外なことだったのでしょう。だから句にしたのです。

「海鼠曰く我亦・・・」、殆ど無抵抗のままに捕らえられて切り刻まれる海鼠に同情を寄せています。海鼠にも言いたいことがあるのだと。

「大乗も小乗もなき・・・」、大乗小乗仏教ですね。おそらく、この海鼠には信心などないだろうという句です。佛心の有無は人格の尺度となっていたのでしょう。佛心の無い下等な生き物として哀れを感じたという句です。

「何の故に恐縮・・・」、手で触れたときに縮んでしまったのですね。それを恐縮したように感じたのです。勿論、漱石が海鼠を恐縮したと本気で考えたわけではありません。描写として「恐縮」を使ったのでした。

「生きながら成佛・・・」、人間は　罪深いものですね。ブツギリにして酢のものにしたのでしょう。死ぬことを成仏といいますね。動かなくなったということです。

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。

高橋 ＞　本日も、本当に面白いご解説有難うございました。

今後の作句活動にも、いろいろと役立てさせて戴けたらと思っております。最後に、今日の季語を用いて、ご好評の虎造節で、本日のインタビューを〆て下さいね。

会長 ＞　はいはい、それでは、一節。

♪河豚鍋やあああああ　初手にすするは河豚と汁
次いでいただく河豚刺のおおお　皿に描かれし
山水の色あざやかに迫りくるううううう♪

掲載の記事・写真・イラストなど、すべてのコンテンツの無断複写・転載等を禁じます。